

第3章 京都大学医学部構内 AP19 区の発掘調査

清水芳裕 吉野治雄

1 調査の経過

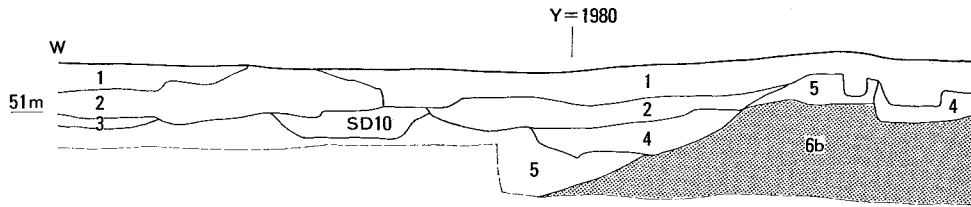
医学部構内では昭和51年度に遺跡の存在が確認され、昭和52年度には今回の調査地点 A P19 区の南西約100mにあたる医学部基礎医学校舎新営予定地の発掘調査を行なった〔京大埋文研79〕。そこでは平安京Ⅳ期新段階から中世京都Ⅲ期古段階にかけての柵、溝、井戸、建物、土塁状遺構、石段状遺構が検出された。また平安後期から鎌倉時代にわたる瓦を一括投棄した瓦溜が存在した。そのことから、この地点あるいは周辺に瓦葺の建物や築地塀があったと推定されている。昭和53年度には今回の調査地点から約100m南にあたる AN19 区の電気管理設工事に伴う立合調査で、弥生後期の壺と甕數十片が出土した〔京大埋文研79・80〕。これは北部構内と教養部構内で確認された弥生前期・中期の遺跡に加えて新たな資料を得ることになった。

昭和54年度医学部総合解剖センター新営に伴って、敷地内 A P19 区の試掘調査を行なった。6ヶ所に試掘坑を設けて遺跡の確認と層位の観察を行なった結果、平安時代以降の遺物包含層の存在と縄文時代から奈良時代にわたる遺物が出土することが明らかになった〔京大埋文研80〕。これにもとづいて建設予定地全域の発掘調査を実施した。なお文献史料からは、平安時代以降医学部構内を中心とする地域には次のような寺社および邸が存在していたことが知られている。まず平安後期には花山上皇の野河御所、藤原実定の邸、鎌倉時代には藤原氏勅修寺家流の寺である浄蓮華院、楽観院、室町時代には吉田神社の若宮などである〔泉80〕。

旧法医学教室の基礎、諸配管および表土をまず機械で掘削し、構内座標にしたがって真北方位の10m方眼で地区割を行なった。土層の堆積状況は東西で大きく異なるため、層位観察用の畔を東西3ヶ所、南北2ヶ所に設けた。また遺構および層位の実測は適宜1/5～1/50の縮尺を用いた。

2 層位 (図版4, 図3)

調査区の現地表面はほぼ平坦で標高約52mである。表土(第1層)下の層序は小地区によって大きく異なっている。黒褐色土(第2層)は Y=1980以西に限って堆積しており、近世以降の耕土と考えられる。赤褐色土(第3層)は調査区の北西隅に、茶褐色土(第4層)は調査区中央部に広く堆積し、平安京Ⅳ期中段階～中世京都Ⅱ期新段階の遺物を中心として一



- | | | | |
|--------------|--------|----------|-----------------|
| 1 表土 | 3 赤褐色土 | 5 黄色シルト | 6b 黄褐色砂礫(鉄分を含む) |
| 2 黒褐色土(近世耕土) | 4 茶褐色土 | 6a 黄褐色砂礫 | |

図3 北壁の層位(1)

部縄文時代から奈良時代の遺物も含む。これが本調査区の大部分を占める遺構埋土である。Y=1980以西では第2層と第4層との間に赤褐色土が存在し、中世京都Ⅱ期の土師器を含む。第5層は第4層とはほぼ同一範囲に分布する黄色シルトであり、遺物を含まない。また Y=2015以东では黄色シルトがなく、黄灰色砂が表土下に直接現われる。遺構はこの砂層を掘り込んだ状態で検出され、砂層からやや磨滅した縄文土器十数点が出土した。砂層下の砂礫層(第6a・6b層)上面は調査区の東端部と西端部で約1.2mの比高差があり、この傾斜が遺構の形成に大きく作用したものと考えられる。

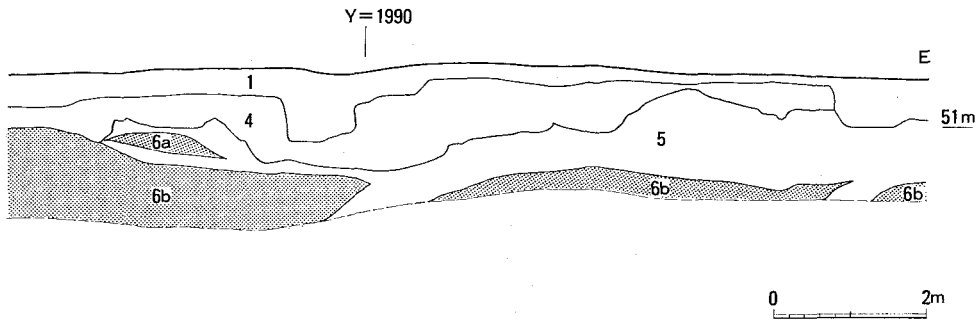
3 遺 構 (図版3・5, 図4)

検出した遺構は柵、野壺、井戸、溝、土坑、集石遺構が主なものであり、図4では近世以降の柵は省略している。

柵 1辺10~20cmの方形あるいは径約10cmの円形掘形をもつ柱穴列で、調査区西端部で多数検出した。直線に並ぶものはすべて東西方向で、柱間は2.4~2.5mを測る。

野壺 漆喰製で下半部のみ検出でき、SE5~SE7・SE9は近世以降のものである。

井戸 石組と素掘りの2種がある。このうち円形掘形に円形石組のものはSE1とSE10、方形掘形に円形石組はSE3とSE12である。また円形素掘りで底に方形の木杵を設けるSE2、方形素掘りで底に方形の木杵を設けるSE11とSE15、方形素掘りで底に円形の掘込みをもつSE14などがある。SE2は平安京Ⅳ期ごろ、SE11、SE13、SE14、SE15は中世京都Ⅰ期古~中段階、SE12は中世京都Ⅰ期ごろ、SE1とSE3は中世京都Ⅱ期中段階にあたる。これらのことから、素掘りで底に円形あるいは方形の掘込みを設けるものが古く、石組をもつものが新しいという新旧の差を構造のうえに認めることができる。SE1では2孔を穿った直方体の罅が、SE2の方形掘込みの底面から須恵器すり鉢が、SE15の方形掘込みの底面からは曲物(図版5-2)がそれぞれ出土した。SE



北壁の層位(2)

3, SE10, SE12では凝灰岩が出土し、その中には一部に面を作り出した加工の認められるものや、焼けた痕跡のあるものも含まれている。特にSE10では、これが石組の一部として利用されていた。SE8は近世以降の井戸で野壺SE9と対になる。

溝 Y=1980付近の北半には、SD10がほぼ真南北方向で存在する。幅約2.4mで黄色シルトを掘り込み、黄褐色砂礫層に達して、最深部で検出面から約1.0mの深さをもつ。X=1400以北では約0.6m立ち上がって浅くなり、調査区外へ延びる。下層から出土する土師器は中世京都Ⅱ期古～中段階にあたる。そのほかにチャート製縦長剃片も出土した。

土坑 小規模で主に土師器を含む土器溜と、不定形で広範囲に広がり掘形の輪郭も明瞭でない不定形土坑からなり、後者には集石を伴うものもある。平安京Ⅳ期中段階から中世京都Ⅱ期新段階にかけてのものが大部分を占める。土器溜としてはSK30, SK41～SK45, SK53, SK63, SK66を検出した。SK66が平安京Ⅳ期中段階、SK30が中世京都Ⅰ期古段階、SK63が中世京都Ⅰ期古～中段階、SK41, SK43, SK44, SK53が中世京都Ⅱ期中段階、SK42が中世京都Ⅱ期新段階にあたる。不定形土坑はいずれも黄色シルトを掘り込み、その埋土は調査区中央部に遺物包含層として存在する。調査区中央部では、中世京都Ⅰ期古～中段階の土師器を、調査区南半部および西端部ではこれよりやや新しい遺物を含む傾向がある。特に中央北半部では輸入陶磁器、国産陶磁器が多量に出土し、土師器との厳密な相伴関係は確認できないものの、これらを上記の年代幅を中心として捉えることもでき重要な資料である。不定形土坑は複雑な埋積状況を示しており、土坑下面がいずれも黄褐色砂礫上面でとどまって、黄色シルト層の厚い部分に多く形成されていることから、土取り跡と推定できる。これらは遅くとも中世京都Ⅱ期新段階までに大規模な整地によって埋積したものであろう。

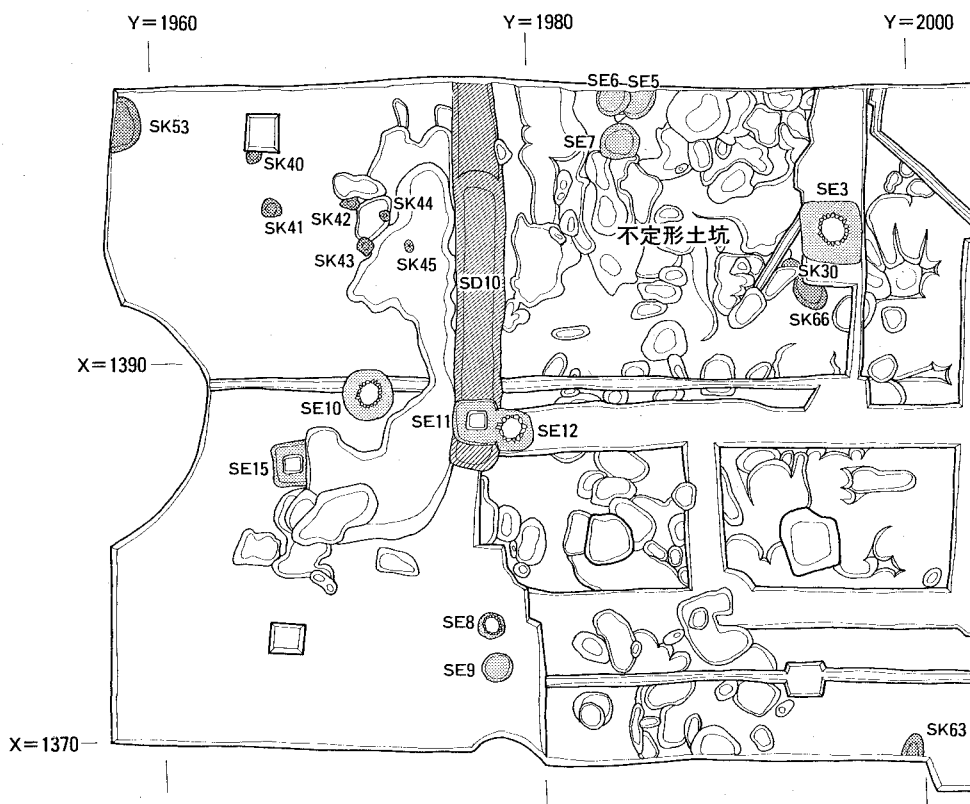
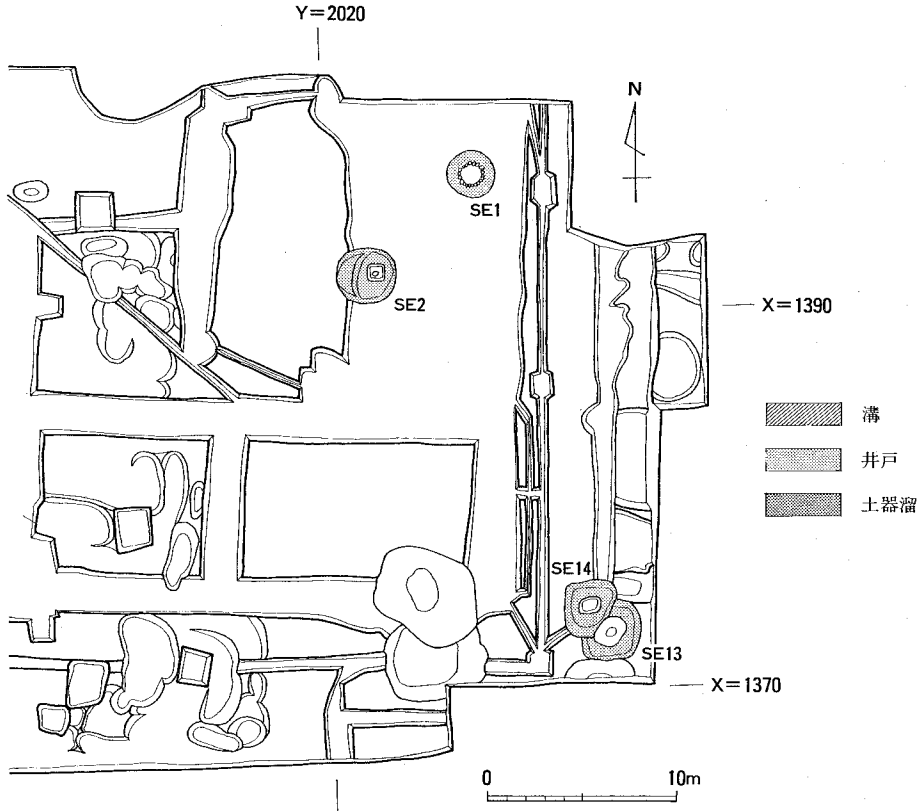


図4 遺構配置図(1)

4 遺物 (図版6・7, 図5)

出土した遺物は、平安後期から室町前期にかけての土師器と輸入陶磁器を中心に、これ以前のものとして旧石器時代のチャート製縦長剝片〔原80〕、縄文土器、弥生土器、古墳時代と奈良時代の須恵器杯、平安前期・中期の土師器杯・皿、須恵器杯・杯蓋・平瓶・小型長頸壺、二彩釉陶器壺などがある。このほか瓦、石製品、釘や銭などの金属製品、井戸枠、曲物などの木製品、近世陶磁器が出土した。総量は整理箱に86箱分である。以下主要な遺構の一括遺物とその他の遺物とに分けて略述する。

土坑SK66からは平安京IV期中段階の土師器(I1~I7)が出土した。大小の規格が明瞭で、大型皿では口縁部外面に2段の、小型皿では1段の横撫でを施すものが大多数を占める。井戸SE1からは中世京都II期中段階の土師器碗(I8・I9)・皿(I10~I13)、灰釉系陶器碗(I14)、白磁皿(I15)、同安窯系青磁碗(I16)、天目碗⁽¹⁾(図版6 I17)が出土し、白磁皿と青磁碗はそれぞれ横田賢次郎・森田勉のいう白磁皿IX-1・c類と同安窯系青磁I-



遺構配置図(2)

1・b類に相当する〔横田・森田78〕。土師器碗・皿はいずれも口縁部に一段の横撫でを施す。碗には大小の規格があり、小型碗は凹底となる。そのほか6×12×32cmの直方体で、側面に縄目が施されて中央部がくぼみ、2孔をもつ罇が出土している。土坑SK53からは中世京都Ⅱ期中段階の土師器碗(I18～I21)・皿(I22～I24)、瓦器碗(I25・I26)、須恵器すり鉢(I27)が出土した。瓦器碗は内面に螺旋状の暗文を施して、断面三角形のごく低い高台をもつI25と、高台を付さず平底化したI26とがあって、それぞれ橋本久和のいうⅣ-1・2にあたる〔高槻市教委80〕。須恵器すり鉢は宇野隆夫のいう5類に相当する〔宇野78〕。土師器はSE1出土のものと比較すると、口縁部が外反して肥厚するものが増加することから、やや新しい傾向がうかがえる。土坑SK42出土の土師器碗(I28～I31)は大小の規格をもち、大型碗には丸底と平底があり、小型碗の凹底は顕著でない。中世京都Ⅱ期新段階ごろにあたる。

以下の遺物は不定形土坑から出土した。I32は6世紀末頃の須恵器杯で内傾する低い立

ち上がりをもつ。I 33は平城宮Ⅲ・Ⅳ〔奈文研76a〕にあたる土師器杯、I 34(図版6)は二彩釉陶器壺である。I 35は須恵器小型長頸壺で、肩の張りは弱く口縁部をつまみ上げる。平安京左兵衛府跡S D 1に類列があり「て」字状口縁の土師器皿と共伴している〔京文研78c〕。I 36・I 37はともに土師器皿で、前者は糸切底をもち、白河北殿北辺の調査S E 30に類例があり、平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している〔京大埋文研81〕。I 38は口縁部を外反させ高台が外に張る灰釉系陶器碗で内面には厚く灰釉がのる。I 39は瀬戸入子で、口縁部を篋状工具で押さえて8弁の輪花状にする。I 40～I 42は白磁碗である。I 40は黄灰色の釉がかかり、白河北殿北辺の調査S E 30では同じ釉調で同形の白磁碗が平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴する〔京大埋文研81図版18-401〕。I 41は白磁碗Ⅳ類〔横田・森田78〕。I 42は内面に繊細な櫛描文を施す。I 43は青磁碗で型押しの花文を施し、全面に淡青灰色の釉がかかる。畳付には目痕が、底部見込には削りジワがみられることから高麗青磁と思われる⁽²⁾。I 44～I 46はいずれも龍泉窯系青磁で、それぞれ碗Ⅰ-5・b類、杯Ⅲ-1・a類、皿Ⅰ-1・b類にあたる。I 46は黄褐色の釉が厚くかかり底部を搔きとる。I 47・I 48は青白磁である。I 47は型押し花文小壺蓋、I 48は釘描花文皿である。いずれも同一層位出土の遺物との関係から14世紀を降らないと考えられる。S E 15出土の曲物(図版5-2)は径約20cmの桶側の破片と目釘の残る底板とである。

軒瓦については以下にまとめて記述する(図版7)。I 50は2本1対の圏線で区画を行ない、その間に珠文を配するものである。I 54は曲線顎をなし顎部に2本1対の凸線を2対もつ。京都市伏見区がんせんどう遺跡からこの組合せの軒瓦が出土している〔星野56第2図、京都府教委66図版第10〕。平安中期ごろのものであろう。I 51は単弁八葉軒丸瓦で範の打ち込みが悪く瓦当は楕円形をなす。烏丸線№34トレンチの瓦溜で同範品が出土している〔烏丸調査会80図版29-41〕。12世紀中葉にあたる。I 52・I 53は右巻きのパ文軒丸瓦であるが、I 52は外区に珠文を配し巴も肉厚で先端が尖る。I 53は巴が扁平、瓦当も小型で、I 52より時代の降るものである。I 53はS K 45から出土し、13世紀中ごろを下限とする。I 55は左右両端から出る唐草の蔓を組合せたもので、S K 14から出土した。栗栖野瓦窯の製品〔木村35第4図11〕で12世紀前半のものであろう。I 56は半截花文軒平瓦で栢杜遺跡出土品〔烏羽離宮跡調査研究所74〕と同文で12世紀中葉と考えられる。I 57は左巻き巴文を6単位配するもので、12世紀中葉にあたる。I 58は剣頭文軒平瓦で凹面に篋記号をもつ。折り曲げ造りによるもので曲げジワを残す。12世紀後半にあたる。I 59は同心円状の単位を向きを逆にしながら6つ並べた波状文軒瓦である。薄手で布目は細かく、瓦当面にも布目

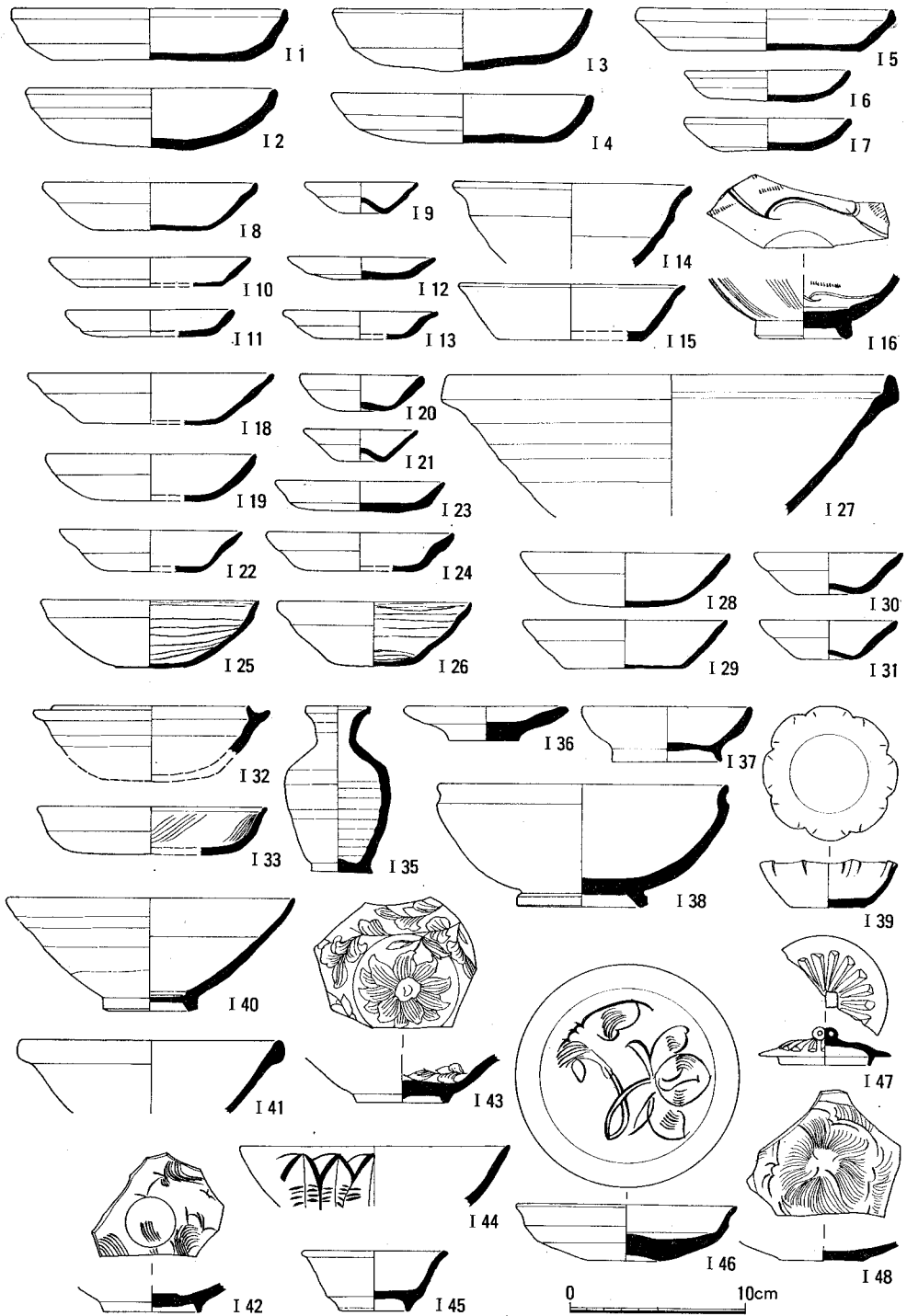


図5 SK66 (I 1~I 7土師器), SE 1 (I 8~I 13土師器, I 14灰釉系陶器, I 15白磁, I 16青磁), SK53 (I 18~I 24土師器, I 25・I 26瓦器, I 27須恵器), SK 42 (I 28~I 31土師器), 不定形土坑 (I 33・I 36・I 37土師器, I 32・I 35須恵器, I 38・I 39灰釉系陶器, I 40~I 42白磁, I 43~I 46青磁, I 47・I 48青白磁) 出土の遺物

が残り、折り曲げ造りによるものである。S D10から出土した。I 60は鬼瓦の脚部。2本1対の凸線と突出する珠文で装飾されている。このほか宝相華文軒丸瓦、同軒平瓦や大きく突出する目・眉・鼻を作りだした鬼瓦片も出土した。

5 小 結

本調査区で明らかになった遺構のうち、土坑には土師器を一括廃棄した小規模な土器溜と、広範囲に広がり出土遺物にも時期幅をもつ不定形のものとの2種がある。これらの遺構形成の過程は次のように考えられる。まず、平安京Ⅳ期中段階のS K66のような土器溜があり、その後に黄色シルト層を掘り込む土取りが行なわれ、中世京都Ⅱ期ごろに大規模な整地がなされている。これが不定形土坑として捉えられたものである。土坑S K41～S K44はその整地後に掘り込まれ、土器が廃棄されたものである。また井戸には素掘りと石組の2種があり、特に素掘り井戸には木枠と曲物が良好な状態で検出できたため、中世の井戸の構造を知る上で重要な手掛りを得た。出土遺物では、不定形土坑を中心として龍泉窯系および同安窯系の青磁のほか白磁、青白磁、南方窯系の陶器などが多数出土したこと、高麗青磁と考えられるものが確認されたことおよび鬼瓦や加工痕のある凝灰岩片の出土は特筆すべき点である。

本調査の結果と昭和52年度の医学部構内A O18区の調査結果とを比較すると、A O18区では平安京Ⅳ期新段階から中世京都Ⅱ期古段階までの遺構が中心であり、S K66のような平安京Ⅳ期中段階にまで遡る遺構はない。また土取り跡と考えられる不定形土坑もみられず、近接する地区でありながら遺構の形成時期と性格に若干の差が認められる。このような点を考慮して、両調査区の成果を含めた報告書作成のため現在整理作業を進めているところである。

〔注〕

- 1 同志社大学講師鈴木重治氏から吉州窯系の製品であるとの御教示をいただいた。
- 2 京都大学文学部助手岡内三真氏に御教示をいただいた。